

大津波の被災地を訪ねて

ルポ 魂を抜き取られる“想定外”の光景



ジャーナリスト 三山 喬

地震に続く大津波発生から数日後、新潟・山形回りで被災地に入ったジャーナリストの目に映ったものは、抜けるような青空の下の「魂を抜き取られるような光景」だった。現実離れした風景の瓦礫の原で、あの日、現実にかきた地獄絵図……。ただ呆然とするばかりの見聞を三山氏が綴る。(写真は大津波に襲われた陸前高田市の惨状=筆者写す)

あまりにも現実離れした「現実」

海沿いの低地にほんの数メートル四方だけ、土饅頭のように唐突に盛り上がった高台があった。

つい先日まで、小さな祠ほらこが建っていたという頂にその痕跡はなく、傍らにふたつ並んでいた郷土出征兵士の巨大な忠魂碑は、一方が仰向けに倒れていた。三階建て集合住宅ほどの高さは優にあるこの場所も、住民の「逃げ場」としては、何の役にも立たなかったらしい。

土煙を巻き上げ、暗緑色や赤色の大型車両が頻繁に行き交う。口元をマスクで覆い、普段着姿で歩く市民も、ぼつりぼつりと見える。

頭上には、抜けるような青空が広がっていた。壮絶な地獄絵図が繰り広げられた「あの日」から、まる一

身が同行する編集者に発した感想と一言一句同じだった。

「公僕の使命」を優先する人々

三月の中旬から下旬にかけて、私はある月刊誌の取材で、宮城と岩手の大津波被災地をレンタカーで回った。福島原発の状況悪化が懸念されたため、大事をとり、往路では迂回して新潟と山形を高速道で抜けた。両県の給油所にほとんど行列はなく、おかげで、最大の不安材料だったガソリンを、予備タンクに入れる分まで確保することができた。

ビジネスホテルが営業を再開した岩手県内陸部の一関市を拠点に、主に同県の陸前高田市と宮城県三陸町に通った。宮城県石巻市の日赤病院なども訪ねた。

被災地は異様な興奮状態にあった。

週間後の午後。一帯を覆う瓦礫は、アスファルト上だけ左右に押し退けられ、通行路がようやく確保されていた。宮城県名取市の沿岸部。もしかして、ここはかつて農地だったのだろうか。そんな的外れな質問を発してしまうほど、建造物はごくわずしか残されていないかった。平地を埋めていた住宅街の名残は、むき出しになったコンクリートの土台と、撒き散らされたその破片だけ。おもちゃ箱のミニカーをぶちまけたように、仰向けに、横倒しに、ここかしこにひしゃげた車が転がっている。

●みやま・たかし

一九六一年神奈川県生まれ。東大経済学部卒。朝日新聞記者を十三年間勤めたのちペルーに移住し、フリージャーナリストとして活動。二〇〇七年に帰国後も幅広いテーマで取材活動を続けている。著書に「日本から一番遠いニッポン」。最新刊「ホームレス歌人のいた冬」は大好評を博している。

る。

ふと湧き起こった既視感をさかのぼると、一、二年前に見たドキュメンタリーの一場面が蘇った。同じような風景のなかを連れ立って歩く子供たち。一枚の写真に残されたその無邪気な笑顔の主を探し出す番組であった。舞台は六十六年前、原爆投下からまだ間もない広島島の焼け野原だった。

発表されている行方不明者の数からいえば、眼前の瓦礫の下にもまだ、無数の亡骸なまがらが埋もれているはずだった。しかし、胸中に不思議と陰惨な思いは起こらない。あまりに現実離れした空間に自分がいま、立っていること、それ自体に、ただただ呆然とするばかりだった。

「まるで映画のセットみたいだ」
近くにいた夫婦の会話から漏れ聞こえた言葉は、ほんの少し前、私自